

別記様式第6

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	フイーン トロン ヒエン HUYNH TRONG HIEN
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 環シナ海における近世日越関係史の研究			
論文審査担当者			
主査	教授	中山	富廣
審査委員	教授	西別府	元日
審査委員	教授	勝部	真人
審査委員	教授	本多	博之
審査委員	教授	八尾	隆生
審査委員	准教授	太田	淳
審査委員	総合科学研究科教授	布川	弘
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、16世紀末から18世紀半ばに至る日越関係について、両国の史料およびオランダ東インド会社（VOC）の貿易関係史料を分析しながら、環シナ海域における両国の国交の意義とそれに伴う貿易の実態を明らかにしようとしたものである。本論文は4章8節の本論と、序論・結論からなる。</p> <p>序論は、原史料の説明と、日本人研究者岩生成一・永積洋子、オランダ人研究者W. J. M. Buch やベトナム人研究者の諸学説を整理し、課題を設定する。</p> <p>第1章「日越交流の政治的背景および交流の開始」では、近世ベトナムにおいては北部の黎鄭政権と中部（広南）の阮政権が、徳川政権とそれぞれ独自の外交・貿易関係を築いていった過程を明らかにしつつ、鎖国完成以前の朱印船貿易の枠組みを概括的に提示する。</p> <p>第2章「朱印船時代前後の日越関係」の第1節「広南阮氏と幕府」では、広南阮氏と秀吉・家康・秀忠・家光、大名の加藤清正、そして本多正純ら幕臣との間で交わされた書簡を分析し、阮政権が積極的に朱印船を誘致し、とくに第2代阮福源は対外貿易の促進をはかり、対立する黎鄭政権からの自立を図ろうとしたことを明らかにした。第2節「東京鄭氏と幕府」では、側近の宦官に外交をゆだねていた黎鄭政権が当初は貿易に消極的であったが、1610年代半ばより日本からの商船・商品を歓迎する姿勢に転じたこと、そして鄭・阮氏の両政権とも朱印船商人を優遇したので、ベトナムが内戦状態であるにもかかわらず日本商人が多数渡越したことを指摘する。</p> <p>第3章「ホイアン日本町角屋氏と東京通事魏氏」は、第1節で広南阮氏のホイアンで終生貿易活動に従事した角屋七郎兵衛を考察する。伊勢出身の七郎兵衛は鎖国後、しばらくして中国ジャンク船を利用して交易物資や銀子を長崎へ送っており、本国の兄弟らとの書簡のやり取りを分析して、鎖国後の民間レベルの交流状況を明らかにした。第2節では、東京・広南の漂流民の通訳に従事した東京通詞の存在を紹介し、東京生れの魏九使の下僕「喜」が魏氏の姓を名乗り、その後世襲されていくが、その仕事は漂流船の減少にともない次第に形骸化されていったことを指摘する。</p> <p>第4章「17, 18世紀日越間の貿易」は、鎖国後の日越貿易がVOCによってのみ継続されたのではなく、ベトナム発ジャンク船の活動が大きな役割を果たしていたことを実証したものである。第1節「日越貿易の新たな担い手」では、環シナ海域の新勢力であるオランダVOCに焦点をあて、鎖国に至るまでの対日本・広南・東京での交易活動について、その困難にみちた過程を概述している。</p>			

第2節「17, 18世紀の日越貿易」では、長崎入港船の定量分析を行い、ベトナム発ジャンク船が毎年5～10艘前後来航し、18世紀には断続的ながらも1767年まで続いたこと、逆に東京・広南には1630年代までは朱印船の入港が多いが、鎖国以後はジャンク船・VOC船が上位を占め、とくに東京よりは広南に多く入港したこと、東京・広南－長崎貿易では銀・銅と生糸・絹織物が取引され、ベトナムにおける銅銭不足も解消されたこと、1660年代以降には生糸貿易が衰退して、広南から砂糖・胡椒・鹿皮などがジャンク船によって大量に運ばれたことなどを数量的に明らかにしている。

結論は、以上の内容要約で締め括られている。日越交換文書などにやや誤読もみられ、まだ未公開オランダ史料や東京イギリス商館史料の分析など、要請される課題も多いが、従来、東京－長崎間の交易分析に偏りがちであった日越貿易関係についての、広南－長崎間交易をも加えた分析は、今後の海域史研究に大きく寄与するものと評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。